

# イギリスの伝説に現れる植物—I

池田 広昭

一般科

## Plants that Appear in British Legends—I

Hiroaki IKEDA

### Abstract

The purpose of this paper is to present a comprehensive list of plant names, along with their frequencies, which appear in Part B, Volume I of *A Dictionary of British Folktales in the English Language* by Katherine M. Briggs. How these plants are dealt with in the folktales is also described.

Key Words: Plant, Folktale, Britain

### 1. 序

本稿は池田（1997）「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」と池田（1998）「イギリス民話の笑い話、ノヴェル及びナーサリーテールに現れる植物」の続編にあたるもので、Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part B, Volume I（もともと4分冊で出版されているものの第三分冊に当たる）に集録されている民話中の植物に関して、その種類、登場回数、文脈中での扱われ方をまとめたものである。なお、上記池田（1997）と池田（1998）はそれぞれ、同書 Part A, Volume I と Part A, Volume II についてのまとめである。

Briggs の *Dictionary* の Part A には narratives という分類名のもとに2巻があてられ架空性の高い民話が集録されている。一方 Part B には地名、地形の由

来あるいは土地や家にまつわる妖精、幽霊伝説等現実の世界とのつながりが多少ともある話が legends という名のもとに集録されている。これも2巻よりなる。本稿で扱うこの Part B の最初の volume には black dogs, bogies, devils, dragons, fairies, ghosts, giants という分類に属する伝説が集められている。これら下位分類をみれば明らかなように、この巻の話は現実とのつながりがあるといってもあまり深いものではなく、narratives にくらべれば現実の地名や人名への言及がある点で深いといった程度のものであることが多い。したがって、民話の性質としては Part A の narratives と Part B, Volume I の legends は全体的にみて大差ないと言うことができる。

### 2. 植物の種類と頻度

Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language, Part B, Volume I* に集録されている民話に現れる植物の種類と登場の頻度及び扱われ方を、登場の頻度が高い順に一覧にして以下に示す。

植物名を拾い出すにあたっては以下の基準をもうけている。(一部この巻に即して変更を加えた以外は池田(1997)、池田(1998)で設定した基準と基本的に変わらない。)

一、名詞以外の品詞も採る。ただし一覧での見出しは名詞形に統一する。たとえば動詞として使われている *nettle* と形容詞形の *grassy* はそれぞれ *nettle*, *grass* の見出しのもとに入れてある。

一、複合語の一部として含まれている植物名も採る。*Apple-picking* の *apple*, *cornfield* の *corn* 等がこれにあたる。

一、方言形については、それが標準英語の語形の訛ったものである場合は、その方言形を別の見出しとして立てず標準英語の語形のところに入れる。したがって *birk* と *coarn* はそれぞれ *birch*, *corn* の見出しに入る。しかし標準語形とかけ離れた方言形は別の見出しとして立てる。たとえば *potato* の意の方言 *teddy* は別に *teddy* という見出しを立てる。

一、固有名詞(人名、地名等)として使われている植物名も本来の植物の意味合いが生きていると思われるときは採用する。*Oakmen*, *Barren Holly* 等の擬人化された *oak*, *holly*, あだ名の *Bobby Griglan* の *griglan*, 牛の名として使われた *cherry* 等がその例である。

一、本文中に説明のために直接書き込まれている編者または著者の註に現れる植物名は採らない。

一、植物名には日本語訳を付すが植物学的正確さを意図するのではなく、おおまかな参考程度とする。

植物の頻度は合計登場回数ではなく、ある植物がいくつかの民話に現れているかを鍵として整理してある。(この点も池田(1997)、池田(1998)と同様である。) その一番大きな理由は Briggs の *Dictionary* 中の民話の採録形態(Briggs は *form* と言っている)にある。つまり原典からの完全版ではない、Briggs の用語で言えば, *summary*, *shortened*,

*slightly shortened*, *abridged*, *slightly abridged* といった要約、短縮版がかなりの数含まれている(ことにこの巻ではめだつ)からである。話が削られたり短くされたりしたときに、おそらくその話にとってあまり重要ではない植物がたくさん姿を消したことだろう。したがって単純に合計登場回数だと正確な分析、比較がしにくい。しかし、要約であろうと短縮版であろうと、その話にとって重要な植物は削られずに残っているはずであるから、ある植物が現れた話の数を基準にしたほうが、こういった採録形態の場合にはより意味のある結果が得られるであろう。合計登場回数は参考にとどめるのがよいだろう。

植物の民話中での扱われ方については、主題、モチーフ、背景描写、修辞の項目を設けて整理している。主題は植物が話の中心または擬人化して主人公になっている場合、もしくはそれに近い場合を表す。モチーフは民話を分類する際に使う話素のことで、植物が話の展開の上で欠かせない要素である場合、またはこれに準ずる場合を表す。背景描写は主題でもモチーフでもなく背景の描写またはいろいろな説明に現れている場合を表す。修辞は比喩など文の飾りとして植物が用いられる場合を示す。これらの項目にのせている数字はいくつの話にその植物が現れるかを示している。植物がどういう扱いを受けているかに関する判断は重要度の高いほうにやや傾斜したものになっている。言いかえれば、比較的甘くなっている。ひとつの植物に関して、主題、モチーフ、背景描写、修辞という4項目の数値の合計がその植物が登場する話の数より大きい場合があるのは、同じ話のなかでその植物が2つ以上の扱いをうけていることがあるからである。

「ほかの資料」の項目のところには Chaucer, Shakespeare, Mother Goose (英国の伝承童謡)<sup>1)</sup>, Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part A, Volume I (Fables and Exempla, Fairy Tales), 同 Part A, volume II (Jocular Tales, Novelle, Nursery Tales)にその植物への言及があるかどうかを示してある。言及がある場合はそれぞれ C, S, M, F1, F2 という記号でそのことを示した。

表 1. イギリスの伝説に現れる植物-I

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
corn	穀物, 特に wheat	46	91	0	30	14	2	CSMF1F2
grass	イネ科の野草	31	35	0	7	20	4	CSMF1F2
oak	オーク	17	30	0	8	9	0	CSMF1F2
apple	リンゴ	10	19	0	3	5	2	CSMF1F2
moss	コケ	9	9	0	1	8	0	SMF1
wheat	コムギ	9	17	0	9	0	0	CSMF1F2
thorn	サンザシ	8	10	0	4	4	0	CSMF1F2
turf	シバ	8	11	0	0	8	0	F1F2
fern	シダ	7	14	0	1	6	0	CS F1
rose	バラ	7	7	0	2	3	2	CSMF1F2
potato	ジャガイモ	6	9	0	3	2	1	SMF1F2
heather	ヒース	5	6	0	0	5	0	F1F2
hemp	アサ, タイマ	5	8	0	2	3	0	CSMF1F2
rush	イグサ	5	7	0	0	5	0	CSMF1F2
ash	トネリコ	4	7	0	3	1	0	CSMF1F2
bracken	ワラビ	4	5	0	1	1	2	F1
bramble	blackberry 類の木苺	4	5	0	2	2	0	CSMF1F2
nut	堅果, 木の実	4	6	0	3	1	0	CSMF1F2
oat	カラスムギ	4	6	0	1	3	0	CSMF1F2
acorn	ドングリ	3	3	0	0	1	2	CSMF1F2
bean	豆, ソラマメ類	3	6	0	3	0	0	CSMF1F2
dock	ギシギシ, スイバ	3	5	0	2	1	0	CSM
elm	ニレ	3	3	0	0	3	0	CS F1F2
furze	ハリエニシダ	3	9	0	1	2	0	S F1F2
heath	ヒース	3	3	0	0	1	0	CS F1F2
holly	ヒイラギ	3	7	0	1	2	0	SMF1
ivy	キツタ	3	3	0	0	3	0	CSMF1F2
kail or kale	チリメンキャベツ	3	3	0	0	3	0	MF1F2
primrose	サクラソウ	3	3	0	1	2	0	(C)SMF1
reed	アシ, ヨシ	3	4	0	0	2	1	CS F2
tea	茶	3	4	0	0	3	0	MF1F2
tobacco	タバコ	3	4	0	0	3	0	MF1F2
turnip	カブ	3	6	0	3	0	0	SMF1F2
yew	イチイ	3	4	0	1	2	0	CS F2

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
bent	イネ科の雑草	2	3	0	0	2	0	
clover	クローバー	2	2	0	1	1	0	SMF1F2
cork	コルク	2	3	0	0	1	1	SM F2
ebony	黒檀	2	2	0	0	2	0	SM
foxglove	ジギタリス	2	2	0	0	2	0	
malt	麦芽	2	4	0	2	0	0	CSM F2
mugwort	ヨモギ	2	2	0	2	0	0	
mushroom	マッシュルーム	2	2	0	1	1	0	S
nettle	イラクサ	2	2	0	1	0	1	CSMF1F2
plum	プラム, スモモ	2	3	0	1	0	0	CSMF1F2
rowan	ナナカマド	2	5	0	2	0	0	F1
seaweed	海藻	2	2	0	1	0	1	F1
sedge	スゲ	2	2	0	0	1	1	S F2
sod	turf のこと	2	2	0	1	1	0	F2
vervain	クマツヅラ	2	2	0	0	2	0	
violet	スミレ	2	2	0	1	1	0	CSM
willow	ヤナギ	2	2	0	0	2	0	CS F2
agrimony	キンミズヒキ	1	1	0	0	1	0	C
balm	バルサム	1	1	0	0	1	0	CS F2
barley	オオムギ	1	1	0	0	1	0	CSMF1F2
berry	液果, 漿果	1	1	0	0	1	0	CSMF1F2
betony	シソ科スタキス属	1	1	0	0	1	0	
birch	カンバ	1	2	0	1	0	0	CS F1
blackberry	ブラックベリー	1	1	0	0	1	0	CS F1
black-thorn	リンボク	1	1	0	0	1	0	F1
blaeberry	bilberry のこと	1	1	0	0	1	0	
brake fern	ワラビ	1	1	0	0	1	0	
Bramley	リンゴの品種名	1	1	0	1	0	0	
briar	イバラ	1	1	0	1	0	0	CSMF1F2
burducok	ゴボウ	1	3	0	1	0	0	S F1
burr	ゴボウのイガ	1	2	0	1	0	0	S
cabbage	キャベツ	1	1	0	0	1	0	SMF1F2
camomile	カモマイル, カミツレ	1	1	0	0	1	0	S
carrot	ニンジン	1	1	0	0	0	1	SMF1
cherry	サクランボ	1	1	0	0	0	0	CSMF1F2
chestnut	クリ	1	1	0	1	0	0	(C)SM

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
daisy	デイジー	1	1	0	0	0	0	CSMF1
divot	芝生	1	4	0	1	0	0	F1
Eildon Tree	不明	1	2	0	1	0	0	
flag	アイリスの類	1	1	0	0	1	0	S
flax	アマ	1	2	0	1	0	0	SM F2
French Nut Tree	不明	1	2	0	0	1	0	
ginger	ショウガ	1	1	0	0	0	1	CSMF1F2
gorse	ハリエニシダ	1	1	0	0	0	1	(S) F1
grape	ブドウ (の実)	1	1	0	1	0	0	CS
griglan	heather のこと	1	2	0	1	0	0	
haw	サンザシの実	1	1	0	1	0	0	C
hawthorn	サンザシ	1	4	0	1	0	0	CSMF1
hazel	ハシバミ	1	2	0	1	0	0	CSMF1F2
hoggin	haw のこと	1	1	0	0	1	0	
hop	ホップ	1	1	0	1	0	0	F1F2
kueney	moss or mildew のこと	1	1	0	0	0	1	
leaven	酵母	1	2	0	1	0	0	
lily	ユリ	1	1	0	0	1	0	CSMF1F2
lime	リンデン	1	1	0	0	1	0	(S)
may	サンザシ	1	1	0	1	0	0	M
mildew	白カビ	1	1	0	0	1	0	S
mint	ミント	1	1	0	0	1	0	CS(M)
mistletoe	ヤドリギ	1	1	0	1	0	0	S
mouse-ear	ミミナグサ等	1	1	0	0	1	0	
mulberry	クワ	1	3	0	1	0	0	S
myrtle	ギンバイカ	1	1	0	0	1	0	S
orange	オレンジ	1	1	0	0	1	0	SMF1F2
parsley	パセリ	1	2	0	1	0	0	CSM
pease	エンドウ	1	1	0	0	1	0	(C)SMF1F2
pimpernel	ルリハコベ	1	1	0	1	0	0	S
pine	マツ	1	1	0	0	1	0	CS F1
pod	エンドウマメの莢	1	2	0	1	0	0	
rue	ヘンルーダ	1	2	0	1	0	0	S
seaware	海藻	1	1	0	0	1	0	
sloe	リンボクの実	1	1	0	0	1	0	C
sycamore	エジプトイチジク	1	1	0	0	1	0	CS

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
teddy	potato の方言形	1	3	0	1	0	0	
thyme	タイム	1	2	0	1	0	0	SM
toadstool	毒キノコ	1	1	0	1	0	0	S
tulip	チューリップ	1	5	0	1	0	0	
wallflower	ニオイアラセイトウ	1	1	0	0	1	0	
walnut	クルミ	1	1	0	0	1	0	CSMF1F2
wicken	mountain ash or rowan の意	1	1	0	0	1	0	
wicker	ヤナギ	1	1	0	0	1	0	
wittern	mountain ash のこと	1	3	0	1	0	0	
witty	mountain ash のこと	1	2	0	1	0	0	
wort	(アブラナ科の) 草	1	6	0	1	0	0	CS F1

### 3. 種類と頻度の傾向

Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part B, Volume I に現れる植物の種類は、全般的に見て、Part A, Volume I 及び II の植物と共通するところが多い。表の「ほかの資料」に見られるとおりである。また、Chaucer, Shakespeare, Mother Goose とも、登場する話の数が 3 以上の植物に関しては、かなりの一致がみられる。これら全部に共通する植物の種類傾向としては、日本人の目から見れば、観賞のための植物が非常に少なく、そのかわり、食用、薬用、工芸用、家畜用などのいわゆる有用植物が多いということが言える。観賞的植物が少ないということは、植物が季節感を表さないということにつながる。Primrose, violet, may, hawthorn, rose 等春の季節感を表すものが少しはあるが、ほかの季節感を表す植物はたいへん少ない。日本であれば秋の植物も春の植物と同様あるいはそれ以上にもてはやされ、古来、『万葉集』をはじめとする和歌集、『源氏物語』などの物語、あるいは俳句などで盛んに詠まれ、書かれている。しかし、英国では Chaucer, Shakespeare, Mother Goose そして民話のどれをとっても、明らかに秋の季節を

表わす植物はほとんど登場しない。このことは季節に対する日英のとらえ方の違いを示唆するとも思われる注目すべき特徴である<sup>2)</sup>。

Briggs の *Dictionary*, Part B, Volume I にしか現れない植物名がある。Bent, foxglove, mugwort, vervain, betony, blaeberry, brake fern, Bramley, Eildon Tree, French Nut Tree, griglan, hoggin, kueneey, leaven, mouse-ear, pod, seaware, teddy, tulip, wallflower, wicken, wicker, wittern, witty がそれである。

このうち blaeberry, griglan, hoggin, kueneey, teddy, wicken, wittern, witty は方言形である。標準英語であれば blaeberry は bilberry (コケモモ), griglan は heather (ヒース), hoggin は haw (サンザシの実), kueneey は moss (コケ) または mildew (白カビ), teddy は potato (ジャガイモ), wicken と wittern は mountain ash (ナナカマド, 別名 rowan), witty は mountain ash (ナナカマド) もしくは pear (ナシ) という語になる。標準英語になおしてみるとイギリスの民間伝承や文学によく現れる植物であることがわかる。方言形が使われているというだけのことであり、植物の種類として特に変わった点がみられるわけではない。

Bent (reed, rush, sedge 等イネ科の雑草), foxglove



(ジギタリス), mugwort (ヨモギ), vervain (クマツヅラ), betony (シソ科スタキス属), leaven (酵母), mouse-ear (葉がネズミのミミの形に似た植物。Hawkweed, chickweed, forget-me-not 等), pod (エンドウマメの莢), wallflower (ニオイアラセイトウ) の各語は Chaucer, Shakespeare, Mother Goose, Briggs の *Dictionary* の Part A, Volume I 及び Volume II には登場していないが, *OED* で歴史を調べてみるといずれも 400 年以上前から存在している。その意味では英単語としては決して新しいとは言えない。少なくとも Shakespeare 以降には出てくる可能性があるわけである。また一部は Chaucer の作品に出てきてもおかしくないくらい古い語である。そういった歴史のある植物名がいままで調べた 6 つの資料のうちで Briggs の *Dictionary* の Part B, Volume I だけにしか出てこないということは、偶然であるかも知れない。しかし、これらの植物がイギリス人の関心があり高い植物だという可能性も考えられる。

Brake fern についてはこの形が少し特殊であって使われる機会が少ないものと思われる。通常は単に bracken と言っている。

イギリスは海に囲まれているのにもかかわらず、一般に民間伝承や古典文学で海藻への言及が日本と違い非常に少ない。しかし、Briggs の *Dictionary* の Part B, Volume I には人魚やアザラシ族のセルキーの話が多数集録されている関係で seaweed (海藻), seaware (海藻) という語が登場している。とはいえ、コンブやワカメを区別するように海藻の種類を区別するということはない。

Bramley はリンゴの品種名であり少し特殊な語と言える。ほかで登場することがなくても不思議ではない。

固有名詞化した Eildon Tree と French Nut Tree は何か特定の種類の樹木を指すようだが、明確でない。

頻度に目を転ずると、全般的には Briggs の *Dictionary* の Part B, Volume I には Chaucer, Shakespeare, Mother Goose, Briggs の *Dictionary* の Part A, Volume I 及び Volume II とくらべて目立った特徴はなく、それらと傾向が一致している。集録されている伝説のタイプのせいで moss, turf, fern,

heather, bracken 等が多めなのが目につく程度である。

Corn, grass, oak, apple, wheat などがここでも相対的頻度が高い。これらは Chaucer 以下のいずれにも共通して相対的頻度が高いイギリスの代表的植物である。

Moss, thorn, turf, fern, heather などの頻度が比較的高いのは集録されている話の性格によるものである。一部については後の節で触れることにする。

この巻では rose の頻度が 7 と、*Dictionary* の Part A, Volume I 及び Volume II より少し高くなっているが、Chaucer と Shakespeare には遠く及ばない。創作と民間伝承のスタイルの違いである<sup>3)</sup>。

Briggs の *Dictionary*, Part B, Volume I に現れる植物名の総数は 117 種、合計登場回数は 513 回である。合計登場回数は前述のように参考のためのものである。Part A の Volume I と Volume II にくらべて種類がやや多く、回数が少し少ない。Part B, Volume I は民話の集録ページ数が Part A の Volume I より 140 ページ、Part A の Volume II より 40 ページ程度多い。また合計登場回数は Part A の Volume I が 616 回、Part A の Volume II が 568 回であったから、Part B, Volume I の植物名の分布密度が一番低いということになる。

この巻は black dogs, bogies, devils, dragons, fairies, ghosts, giants というふうに分類された話が収められているが、この中で植物が一番登場するのは fairies であり植物の分布密度が一番高い。これにくらべてほかのところはそれほど高くない。Fairies という分類の話が含まれていなければ登場する植物名の合計回数はかなり少なくなっていたことだろう。民話に関しては、妖精が登場する話と童謡的な話あるいは童謡そのものの場合、目だって植物への言及が増える傾向がある。妖精と植物の結びつきは強く、取り合わせの型が見られる。いずれにせよ、Chaucer や Shakespeare のような修辭的羅列もめったになく、Mother Goose のようなリフレインによる同語の繰り返しもないので、fairies のところが密度がほかより高いとはいえるものの、巻全体としての植物名の分布密度は Chaucer や Shakespeare にくらべてはるかに濃淡が少ない。どこにでも少しは出てく

るという分布の仕方である。これは比較的短い話が多数寄せ集められている、こういった民話集の性格によるところが大である。

#### 4. 登場する植物の扱われ方及び俗信

植物が主人公または主題になっている話は Briggs の *Dictionary, Part B, Volume I* にはひとつもない。これは全体としてこの巻に収められている話の架空性が低く、植物が主人公にも主題にもなりにくいからである。この点は *Part A, Volume II* と同じであり、*Part A, Volume I* と大きく違っているところである。

しかし個々の植物あるいは植物というものに対するイギリス人の伝統的とらえ方、感じ方、言い換えれば、迷信、民俗がよく現れている箇所が随所に見られた。以下特徴的なものについてまとめる。

上で触れたように *fairies* と植物は縁が深く、妖精と植物の取り合わせには固定的な型といったものが成立しているようである。日本でいえば、天狗にヤツデ、河童にキュウリのようなものである。

ここで *fairy* というものが日本に置き換えれば妖精だけでなく妖怪をも含む性格のものだということも注意しておくべきだろう。天狗も河童も、あるいは座敷童も *fairy* というべきものである。日本語としての妖精と妖怪はイメージがだいぶ違うが、いろいろなイギリス民話に登場する *fairy* は日本の妖精という語のイメージからはみ出すところがあり、妖怪という語で捉えたほうがわかりやすい場合もある。しかし、このことを承知したうえで、本稿ではイギリス民話の *fairy* に言及するときは妖精という語を使うことにしたいと思う。イギリス民話に妖怪という語はいかにも似つかわしくないと思うからである。

妖精にも様々な種類があり、主として屋内に住むものと屋外に住むものの区別がある。屋外に住む妖精の住処として“under the fronds of ferns”（シダの葉の裏）と“in the bells of the foxgloves”（ジギタリスのベルの中）という2つの場所が Anne Jefferies and the fairies という話であげられている。「ジギタリスのベル」というのは、言うまでもなく、ジギタリスの花の形が細長いベル形をしているからである。

西洋の妖精の絵によく見られる図柄である。シダの葉の裏やジギタリスのベルの中に住むのは無論妖精のなかでも体が非常に小さなタイプの妖精である。

Fern と妖精の結びつきは強く、ほかの話にも妖精のいる場所の説明に *fern* が何回か登場している（The fairy and the Bible-reader or the legend of Morial's Den, The fairy dwelling of Selena Moor, The fairy tools or Barker's knee, The henhole）。

The fairy widower という話では妖精と羊歯の結びつきがもっと明確に詳しく述べられている。おそらくほかの妖精の話に登場する羊歯もここで述べられている迷信が下敷きとなっているものと思われる。Jenny という娘が何気なく羊歯の葉を折り取ってしまった。すると、妻をなくした妖精が現れて、一年間子供の世話をしてくれないかともちかける。Jenny は承諾するが、妖精の家についていく前に羊歯の葉にキスをして一年間とどまることを誓わされる。そうして歩いて妖精についていくが、なかなか着かないので疲れて涙を流す。妖精は彼女を休ませ、葉（はつきり *fern* とは言っていないが、多分羊歯の葉であろう、と Briggs も推測している）をひとつかみとって片方ずつ彼女の目を撫でた。すると涙もかわき、疲れもとれた。そればかりかひとりでに体が動きだし、口を開いた地面からすごいスピードで地中にもぐり始めた。下に着いたときに先ほどと同じく葉（多分羊歯の葉であろう）で目を擦られた。そしたら目の前は妖精の国だった。妖精の目が与えられたのだ。話はまだ続くが、このあとは羊歯とあまり関係がない。羊歯の葉あるいは羊歯の胞子は魔力があるとされる。

Bracken は *fern* の一種であり、*fern* と同様に妖精の住処と考えてよい（The grig's red cap, The Duerger）。Brake *fern* も同様である（The vixen and the oakmen）。Bracken は妖精に関連して比喩として用いられることがあるが、そのことに妖精と羊歯の結びつきの強さが読み取れる（“dressed in clothes like withered bracken” (The brown man of the muirs), “thrive like a brackan” (The ploughboy at the fairy feast)）。

妖精は *thorn*、または *bramble* の藪も住処、ある



いは集いの場所になっている。The ploughboy at the fairy feast という話では畑の真中にある、妖精の木と目され妖精が集まって浮かれ騒ぐとされている thorn すなわちサンザシの木の周りを円く耕さずにおいた少年が見えない妖精から食事のもてなしを受け、臆することなくそれを食べたあと知恵を授かり「ワラビのように栄える」(前出の表現)。Mary Nelson という話ではお産のときに妖精の国にさらわれていった Mary があるとき野原を馬に乗って通りかかった夫に話しかけ、自分のおかれた状況と救出方法を伝える。その際、自分がこうして夫に話しかけたために妖精から受けることになる厳しい罰を免れるには、濠のところまで行って妖精たちに濠の周りの thorn と bramble (イバラ、木苺) をすべて焼き払うと脅かして、罰を受けなくて済むように約束させなくてはならないと話す。夫はそれを実行し妻は罰を免れる。妻の救出のほうは、妻から、夫にはそれを実行するだけの力がないため、妻の兄弟の力を借りなければならぬと言われていたので、兄弟に頼み奪還に成功する。夫と妻の兄弟は妻を取り戻すことに成功はしたが、子供が戻ってこないので仕返しに濠を取り壊そうという相談をし始めた。が、そのとき声が聞こえ、濠から 3 パーチ以内の土地に鍬を入れず、その周りの藪やイバラを損なわなければ子供は無事に返すというので、その条件で子供を取り戻す。このようにある種の妖精にとってはサンザシとイバラは大切な木である。上の 2 つの話ほど明白ではないが、To please the piggies と The fairy dwelling on Selena Moor という話でもやはり妖精と thorn または bramble のつながりを伺わせる箇所がある。

Furze すなわちハリエンシダの藪もよく妖精の現れる場所である (Betty Stogs and the fairies, The Lothian farmer's wife, Skillywidden)。

いままで取り上げてきた植物は妖精が現れるところにたまたま生えていたというような意味合いのものではなく、もっと積極的に妖精が好むまたは必要とすると見られている植物であり、妖精の植物と言うべきものである。妖精は身を守るためか bramble, furze, thorn などのとげのある植物を好むようだ。ま

た羊歯はイギリスでは日本では考えられないくらい広大な荒地に一面に生えており、羊歯が妖精の住処とわかっていてもあまりに範囲が広く探し出すのが容易ではないだろう。この点が身を隠すのに好都合なのだろう。Furze も同じような性格がある。

外に住む陸の妖精は畑の中や縁のサンザシやイバラの茂みを住処とするのでなければ、あとは主として森や荒野に住むことになる。しかし森に住む妖精はこの Part B, Volume I ではあまり多くないようである。荒地のほうを代表する植物はすでに上で取り上げた植物のほかにもあり、この巻の妖精話にも登場している。湿地帯に多い reed や rush や sedge, そしてそれらを総称する bent, あるいは heather, griglan や moss などであり、妖精の活動する環境の描写に現れている (reed: The henhole, The Hyter sprites; rush: The Asrai, The doomed rider; sedge: The gloaming bucht; bent: The piper of Glendevon; heather: The poor man of Peatlaw; griglan: Skillywidden; moss: Betty stogs and the fairies, The duergar, The fairy widower, The henhole)。しかし、これらは話のなかで fern や thorn にみられるような妖精との積極的なつながりは示されていない。

住む場所とは違う意味で、妖精とつながりの深い植物がある。Betty Stogs and the fairies にそういった植物が列挙されている。母親の子供に対する面倒のみかたが悪いからということで懲らしめのために妖精が子供をさらい、母親の反省をうながし、返してやるときに子供をくるんでいたものの中に violet, primrose, wallflower, balm, mint などが入れられていたという。すべて花が美しかったり、香りがすがすがしかったりする植物である。妖精はこのようにきれいで香りのよい植物を好む。

Violet と primrose はほかの話にも妖精との関連で現れている。Fern のところで取り上げた The fairy widower という話では、Jenny が妖精から "I watched you ... stealing some of my sweet-scented violets to put in those lovely tresses..." と指摘されるくだりがある。ニオイスミレが妖精の花であるとされていることがわかる。John Reid and the mermaid では人魚とサクラソウの関連がほのめかされている。The Stanhope

fairies では水辺でサクラソウを摘んでいた女の子が洞穴から音がするのを聞きつけて中に入り、妖精たちがお祭り騒ぎをしているのを目にする。妖精たちは領域を侵されたのに怒って女の子をさらにくるというふうに筋が展開していくが、ここでもサクラソウが妖精の花であることが強く示唆されている。

How Joan lost the sight of one eye にも妖精とかわりが深い植物の列挙が見られる。魔女の Betty の軟膏をこっそり目に塗った Joan は激しい痛みに襲われたが、小さな妖精たちがにぎやかに華やかに動き回っている世界が見えるようになった。Betty は妖精たちから大々的に敬意を受けている。そして妖精の紳士たちが彼女のひざに何百という花を投げていく。その花の中で特に four-leaf-clover, agrimony, betony, camomile, vervain, mouse-ear の名があげられている。Betty の作る膏薬と魔法の水薬の原料だとある。また foxglove の瓶から海と陸の露や染料が Betty のドレスに注がれるさまが語られている。このあと Joan がタブーを破ったことがはっきり露呈することになり、その報いとして彼女は軟膏を塗ったほうの目の視力を奪われる。これらの植物に関しては魔女の薬の原料として名を列挙してあるだけでほかは何の説明もないが、現実には薬効や魔力に関して何らかの民間伝承のある植物ばかりである。Foxglove はここでは住むところとしてではなく容器として登場しているが、やはり妖精との結びつきの強いことが表れている。

キノコと妖精 (pixies) も関係が深い。To please the pigsies という話 (前出) では怠け者の男が妖精の mushroom を盗んでいるところを捕らえられてサンザシやイバラの藪の中を一晚中引きずりまわされて懲らしめられる。Lazy Molly では妖精のために煙突のところにきれいな水を出しておいてあげてを怠った女の子が妖精の怒りに触れ罰として7年間片足をきかなくされてしまう。その期間の明けるときその女の子が mushroom を摘んでいると妖精が現れて、手にもっていた植物で悪い足のひざを打ったところ足も治り町一番の踊り手になった。その植物は Dartmoor に生える 7 音節の名の植物なのだが語り手は名を忘れて思い出せない。Pixy fair では「ピ

クシーの市」で男が妖精の金のカップを盗んで帰り、翌朝真っ先にそれを見たら大きな toadstool (毒キノコ) に変わっていた、そのうえ男の飼っているポニーの足が不具になっていたという話が語られている。キノコが妖精にとって住処なのか食べ物なのか、あるいは薬にするのか、その意味についてはこれらの話からは詳しいことはわからないが、関係が深いということだけは明らかである。Mushroom も fern や primrose と同様、触ると妖精が現れる植物のひとつであり妖精の世界への扉を開くスイッチの役割が与えられている。

食べ物としての植物という点から見た場合、妖精が普段何を食べているのかについてははっきり触れている話がある。The Brown Man of the Muirs という話である。鳥や獣を狩りにきた男に妖精の王様が次のように言う。“How dare ye come here, ye callant? Killing the birds and beasts that are in my charge. Gin nits and blaeberrys dae for me that am their King, sud they nae be gude enough for ye?” 鳥や獣の王であるこの私が、木の実 (nits=nuts) とコケモモ (baeberrys=bilberries) で十分なのだから、おまえだってそれでたくさんではないか、というのである。この Brown Man という妖精が鳥や動物を食べず、木の実やコケモモを常食としているということがわかる。

妖精が nuts を食べるということは A fairy changeling: I という話の changeling (妖精の取り換え子、つまり妖精が人間の子になりすましている) の胸当てに木の実とケーキがたくさん入っていたとある箇所にも表れている。

妖精は穀物も食べる。女の妖精が丁寧な物腰で barley つまり大麦の粉を帽子一杯分借りにきたので貸してやったところ、翌朝同じ分量の粉を返してきた。この粉だけで家族の全員の分と手伝いの者の分のパンを作ることができ、そのあと毎日作ってもなくならず、刈り取りの時期が終わってもまだ残っていたという話がある (Fairy friends)。これはやはり barley が妖精の食べ物だと解釈するのが妥当だろう。

この話と一部共通するところのある The fairy and

the oatmeal という話では、妖精の女王とおぼしき人がある女のところに来て、oatmeal を一鉢めぐんでほしい、いついつの日に返すからと頼む。要求に応じたところ、約束の日には召使いと思われる女がオートミールを返しに来て、極上の穀物の粉だから家のもの全員で食べるようにと言う。一人だけ召使いの少年がこれを嫌がって食べなかったところが、まもなく死んでしまう。いく晩かのち、妖精が粉引きの手伝いにくる。このことからオート麦を食べる妖精がいることがわかる。

小さな妖精が wate (=wheat) すなわち小麦の穂を納屋からひつつずつ盗み出すということが Brother Mike という話に見えている。したがって小麦を食べる妖精もいるようだ。I weat, you weat でも妖精が corn をひと藁ずつ鍵穴から盗み出すということが語られている。The little man's gift でも妖精が袋から穀物を盗む。いずれも盗み出してどうするかについては語られていないが、食べると考えてもよいだろう。

妖精の国には果物が生えていて、そこに迷い込んだ、あるいは連れて行かれた人間がそれを食べると人間界に戻れなくなるというモチーフがある。異世界の食べ物を口にすると人間界に戻れなくなるというモチーフはギリシャ神話、『古事記』にも見られる普遍的なものである。このモチーフの現れる話が Part B, Volume I にいくつか見られるが、植物との関連でもっとも興味深いのは The fairy dwelling on Selena Moor という話(前出)である。ある男がすばらしい果樹園のある妖精の国に迷い込んだ。そこで昔の恋人に出会う。この女は、私に触ってもいけないし果物を食べても花を摘んでもいけない、そうすると二度と家に帰れなくなると警告する。女の話によると魔法の果樹園のおいしいそうな金の plum を誘惑にまけて食べてしまったために取り返しがつかなかったことになった、妖精の国の召使いにされて家に帰れなくなったという。おいしいそうだった plum も口に入れると苦くて気を失ってしまった。妖精の国には見かけは赤いリンゴやおいしいそうな果物があるけれど、本当は sloe, hoggin(=haw), blackberry にすぎないと話す。妖精の国の果物を食べてはならない

というタブーと妖精の国の果物は見かけはきれいでおもしろいそうだが実はまずい果物だということが語られているということ自体非常に興味深いことであるが、それだけでなくここにイギリスの民衆にとって好ましい果物と好ましくない果物が共通の了解事項として示されている点が注目される。すなわち、plum, apple は好ましいもの、sloe, haw, blackberry は好ましくないものというとりえ方である。Blackberry は現在店頭で売られている果物なので少し意外に思われる。こういった暗黙の了解事項はおもてに表れないことも多く外部の者にはなかなか知りたいが、まさに文化というべきもので、そのことを下敷きにして話がすすむので重要である。日本でも、たとえば一部の人たちの間でドクダミがきられているように、一般に好ましくないとされている植物があるようなものである。

妖精の食べ物といえば植物だけでなくミルクも飲むことが The four-leafed clover I に見えている。しかしこの話で興味深いのは、乳搾りの女の子に突然牛のまわりに妖精がたくさんいるのが見えるようになったのがクッションとしてミルクの桶と頭の間にはさんだ草の中に四葉のクローバが混じっていたせいだったとしている点である。上で述べたように How Joan lost the sight of one eye でも四葉のクローバが妖精の植物のひとつとされている。その理由がここに示されているわけである。Fern もすでに見たように妖精が見えるようになる魔法の植物である。

イギリスの民間伝承では以上見てきたように妖精と植物の結びつきが強いと見られているわけであるが、それがもっとも明確に表れていると思われるのが妖精を植物の guardian すなわち守護者、守り神とする信仰である。リンゴを守る子馬の妖精のことが Lazy Lawrence という話に出てくる。話の題名がこの妖精の名である。この妖精はある年老いた未亡人のリンゴ畑を守っている。それをねらっている邪な魔法使いがリンゴ摘みの大駕籠の中に身を潜め、妖精に気づかれずにリンゴ畑の中に入り込み、魔法でリンゴの実を降らせると魔法の輪となって駕籠のなかとそのまわりにリンゴが落ちてくる。しかしその

リングが魔法使いの目にぶつかり、魔法使いは「痛い！」と叫んで駕籠から飛び出して Lazy Lawrence につかまる。魔法使いは自分が降らせたリングの輪の周りを蹴られ、噛まれして一晩中追い掛け回される。翌朝、未亡人と手伝いのものがリング摘みに行ってみるとリングの山の真中で魔法使いが案山子みたいに動けなくなって立っていた。蹄と歯の痕がはっきりとついていたということだが馬の姿は見えなかった。

あるおばあさんの tulip の花壇を守る pixy の話が Pixy gratitude に見られる。おばあさんが生きている間はおばあさんは誰にもチューリップを摘ませることなく大切に育てていたので妖精はそれを喜び魔法でチューリップの美しさと寿命を増してやり、バラのような香りまでつけてやっていた。しかしおばあさんが死ぬとチューリップは引き抜かれ、かわりにパセリが植えられた。妖精はこれを喜ばずパセリを枯らせ、庭のほかのところに何も育たないようにしてしまう。ただ、おばあさんの墓だけはいつも春のように花がいっぱいにし草が生えないようにきれいに保っていたということだ。

Broonie という話では寒さの厳しい夜など妖精が corn の上を飛び回り呪文をかけて穀物を守っていたが、これを気の毒に思った村人が外套と頭巾を作ってあげたらいなくなってしまったということが語られている。

妖精が corn の脱穀の手伝いをするというモチーフの話が多数みられるが、たいていその姿を見られたり感謝されたりするといなくなったり手伝わなくなったりする (The fairy threshers, The king of the fairies, The pixy of Bosko, The pixy threshers, Rewarding a pixy, Skjaere skjaere skulma, Withypool ding-dongs)。

ここで妖精と関係深い植物から目を転じ、ほかの意味で特徴のある植物について述べておく。

この巻には魔除けの効果があるという扱いの植物がいろいろ登場する。そういった魔除けの植物として ash (The sands of Cocker), birch (The wife of usher's well), ebony (Parson Woods and the devilish bird, The prize wrestler and the demon), hazel (The Creech Hill

bull-beggar), pimpernel (同), rowan (The Stanhope fairies, John Rudall and the ghost of Dorothy Dinglett), vervain (The sands of Cocker), wittern (The mermaid of Marden), witty (同), yew (The mermaid of Marden)などが見えている。

幽霊の話をするときは幽霊の出る場所として樹木の種類を言うことが多い。首吊によって処刑されたり自殺したりする場所が樹木であることが多かったことが樹木と幽霊が結びつく理由のひとつであると思われる。そういった幽霊と関係のある木として ash (Ghosts in the Fen, The Gipsy's tale, The green lady), elm (One-eyed stepmother, The rebel and his dog, The story of Jack Green), lime (Madam Wlters), mulberry (The Whitehaven ghosts), oak (Madam Gould: I), sycamore (The skull house), walnut (Madam Gould: III), yew (The rebel and his dog)が話に現れている。

結ばれずに死んだ恋人たちが同じ墓地の近い場所に葬られたところ女の胸からは rose が、男の胸からは briar が伸び出て絡みつき、恋結びになったと Fair Margaret and sweet William という話にある。日本でも古来似たような発想があることが注目される。また、バラに関しては死の指標 (つまり持っているバラが枯れたり変色したりした場合、自分の思う人が死んだということを表わすと解釈する) とする例が The haunted mill に見られる。

Hemp の種を将来を見る占いに使う場面が The Spectre Bridegroom に登場する。イギリスの民俗のひとつである。

三月の nettle と五月の mugwort が結核にきくということが The mermaid and mugwort で言及されている。

The vixen and the oakmen では木に対する迷信がよく表れている。Hawthorn は困った雌狐を助ける善い木、Barron Holly は悪い木、oak はこわいが礼儀正しくすれば親切してくれる木として登場している。この話では木も動物も言葉をしゃべる。Oak は The two ponies ではこわい木として登場している。Oak は木自体が妖精の扱いを受けることもよくある。

もっとも登場回数が多い corn に関しては妖精の植物といった性格のものではないが、繰り返し現れ



るモチーフがある。すなわち、人間が悪魔または妖精に畑の作物の上がいいか下がいいか言わせて、上がいいと言ったときは turnip とか potato を植え、下がいいと言ったときは corn または wheat を植えて、敵に実質的にはにも得がないようにだますというものである (The bogies field, The farmer and the boggart, Davies Direvan, Jack of france, The tops and the butts)。また、同じく人間が悪魔または妖精をだます別のモチーフで、人間のほうが corn または bean の刈りくらべをしようと誘い、悪魔または妖精の刈るところに金属の串のようなものをこっそり立てておき、鎌の刃をこぼれさせて勝つというものがある。悪魔または妖精は、鎌の刃がやられるのは dock のせいだと思い、だまされたのに気づかない (The bogies field, Sir Barney Brograve and the devil, The tops and the butts)。

## 5. 結 語

Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language*, Part B, Volume I に現れる植物は妖精と関連した植物がもっとも多く、迷信、民俗との関わりも深い。妖精と植物の関係が深いということは Shakespeare の *Midsummer Night's Dream* にもよく表れている。この劇は言うまでもなく妖精の活躍する筋立てであり、数ある Shakespeare の戯曲のなかでももっとも植物がたくさん登場する劇である。植物の種類が 50 種、合計登場回数が 88 回という数字はともにすべての劇の中でトップである<sup>4)</sup>。Shakespeare は植物と妖精のつながりについての民間の空気を増幅し洗練させて示したと言えるだろう。

民話や伝説は仮に筆記者が文を相当飾っていても、その装飾の程度や分量が Chaucer や Shakespeare には遠く及ばない。それだけに民衆がどう思っているかということがより生の形で表れるので、たいへん興味深い。今回扱った巻でもそういった民間の植物に対する目がよく表れているので、これと対照すれば Chaucer や Shakespeare, あるいは Mother Goose の植物関連の表現の意味合い、ひいては作品全体の

特徴をよりよく理解するのに役立つものと思う。

## 註

- 1) Mother Goose の範囲は便宜的に Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. (Tokyo: Kenkyusha, 1985) と Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book*. (Oxford et al.: Oxford University Press, 1985) に記載されている唄としている。
- 2) 池田 (1996) 参照。
- 3) 池田 (1999) 参照。
- 4) 池田 (1994) 参照。

## 参考文献

- Briggs, Katherine M. *A Dictionary of British Folktales in the English Language* Parts A and B. London: Paperback by Routledge, 1991.
- \_\_\_\_\_. *An Encyclopedia of Fairies: Hobgoblins, Brownies, Bogies, and Other Supernatural Creatures*. New York: Pantheon Books, 1976.
- The Oxford English Dictionary* 2nd ed. on CD-ROM Version 1.13. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Wright, Joseph ed. *The English Dialect Dictionary* Oxford University Press, First published 1905, Third impression 1986.
- The Reader's Digest Association Limited ed. *Field Guide to the Wild Flowers of Britain*. London: The Reader's Digest Association Limited, 1985.
- \_\_\_\_\_. *Field Guide to the Trees and Shrubs of Britain*. London: The Reader's Digest Association Limited, 1985.
- Opie, Iona and Moira tatem ed. *A Dictionary of Superstitions*. Oxford and New York: Oxford University Press, 1992.
- Pickering, David. *Dictionary of Superstitions*. London: Cassell, 1995.
- Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A*

- Handbook of Nursery Rhymes.* Tokyo: Kenkyusha, 1985.
- Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book.* Oxford et al.: Oxford University Press, 1985.
- 加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』富山房, 昭和54年。
- 加藤さだ著『英文学植物考』名古屋大学出版会, 1985年。
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11) 大修館書店, 1985年。
- P・ミルワード著 中山理訳『英文学のための動植物事典』大修館書店, 1992年。
- 成田成寿編集『英語歳時記普及版』研究社出版, 1983年。
- 安東伸介, 小池 滋, 出口保夫, 船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社, 1986年。
- キャサリン・ブリッグズ編著 平野敬一, 井村君江, 三宅忠明, 吉田新一共訳『妖精事典』富山房, 1992年。
- I・オウピー, M・テイタム編 山形和美監訳 荒木正純, 大熊昭信, 中田元子訳『英語迷信・俗信事典』大修館書店, 1994年。
- デービッド・ピカリング著 青木義孝, 中名生登美子訳『カッセル英語俗信・迷信事典』大修館書店, 1999年。
- 池田広昭(1987)「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11, 昭和62年)。
- \_\_\_\_\_ (1989)「マザー・グースに現れる動物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-13, 平成元年)。
- \_\_\_\_\_ (1992)「Shakespeareの言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16, 平成4年)。
- \_\_\_\_\_ (1993)「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother GooseとShakespeareの比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17, 平成5年)。
- \_\_\_\_\_ (1994)「Shakespeareの言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18, 平成6年)。
- \_\_\_\_\_ (1996)「*The Canterbury Tales*に見られる季節関連の表現と季節観」(『神奈川工科大学研究報告』A-20, 平成8年)。
- \_\_\_\_\_ (1997)「Chaucerの言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21, 平成9年)。
- \_\_\_\_\_ (1998)「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22, 平成10年)。
- \_\_\_\_\_ (1999)「イギリス民話の笑い話, ノヴェル及びナーサリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-23, 平成11年)。